

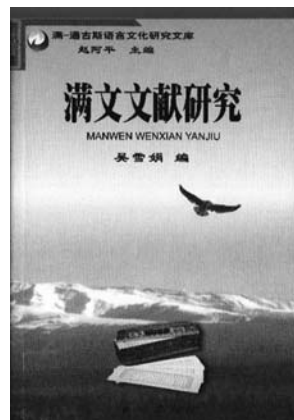
<書評>

吳雪娟編

『満文文献研究』

(民族出版社 2006, 464 ページ)

ISBN 7-105-06488-9



評者 北村彰秀

中国の清朝においては非常に活発に翻訳活動が行われ、それも、満洲語から中国語、中国語から満洲語、満洲語からモンゴル語等いろいろな訳が行われた。清朝の翻訳事情について知ることは清朝についての理解を深めるためにも重要であり、また、政治と翻訳の関係、翻訳の使い方、翻訳方法等、現代の我々にとっても学ぶものは多くあるはずである。しかし残念ながら、清朝の翻訳事情について、日本においては必ずしも十分に知られているわけではない。中国においては研究は少しずつ進められてきたが、このようにまとまった形の文献が出版されるようになってきたことは非常に幸いである。

この著は「満洲ツングース系の言語・文化研究シリーズ」中の一冊であり、満洲語文献研究のテーマで今までに書かれた論文、報告書、随筆等をいろいろな学会誌等から集めてきて、一冊の書物としたものである。そのため、特に新しい情報があるわけではないが、研究者にとって、またこの分野に興味のある者にとっては非常に便利である。特に翻訳ということをかかげてはいないが、清朝においては満洲語から中国語、中国語から満洲語への翻訳文献が非常に多いため、満洲語文献研究の大部分は翻訳研究とならざるを得ない。

全体で 30 編の論文等をいくつかのカテゴリーに分けて掲載しているようである。ただし見出しがついていないため、どのように分類しているのか、各論文、論考の表題から判断せざるをえないが、大体以下のような配列になっているのではないかと思われる。

- (1) 満洲語文献全体にかかわるもの
- (2) 歴史書に関するもの
- (3) 辞書に関するもの
- (4) 地誌などに関するもの

---

KITAMURA Akihide, "Book Review: Manwen Wenxian Yanjiu," *Interpreting and Translation Studies*, No.15, 2015. Pages 215-216. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

(5) 翻訳方法を論じたもの

(6) あまり知られていない満洲語文献の紹介

このうち、翻訳研究の上で特に重要と思われるものは、(1)、(3)、(5)であると思われるため、それらの内容を簡単にまとめておきたい。

(1) は3編からなり、満洲語文献の調査、整理、出版を扱ったものである。

(3) は大清全書という辞書を扱ったもののみである。

(5) は5編からなり、趙阿平のものは、満洲語の単語で中国語に訳しにくいものをどう訳したかということをもとめている。また、白立元のものは、満洲語から中国語への翻訳方法を、移位法、替換法、加詞法、減詞法の4つに分けて論じている。(このような分類、アプローチは中国における翻訳研究ではよく行われている。) 屈六生のもは慣用表現を扱ったものと思われ、また、王小虹のものは、翻訳の際の苦労や細かい作業について簡潔に述べている。黄錫恵らのものは、地名の翻訳方法あるいは表記方法について論じている。

本文は中国語であり、満洲語の部分はラテン文字によって表記されている。

かなり豊富な情報を含み、また興味深いものであると思う。

なお、表紙の絵は満洲語の仏典であるが、仏典を扱った論考がないのは残念である。

また、満洲語文献目録の作成にかかわり、満洲語の辞書についての著書も出している春花の書いたものが含まれていないのは、多少残念なところである。

満洲語翻訳世界の研究は、政治史、仏教史、満洲語以外の言語にもかかわる学際的な研究分野であるため、この一冊でその全体をカバーすることはできないと思うが、それはやむをえないであろう。

なお、同じシリーズで、「満文翻訳研究」という簡単な文献も同じ年に出版されていることも触れておきたい。

(学会においては、満州語、満州民族とは表記せず、満洲語、満洲民族と表記することになっているため、ここでもその慣例に従った。)

.....  
【評者紹介】

北村彰秀 (KITAMURA Akihide) モンゴル聖書宣教会所属。モンゴル側との協力のもとに聖書モンゴル語訳の作業にかかわる。また、東洋における翻訳の伝統の研究、聖書翻訳との比較を行い、あるべき翻訳のすがたを探る。

連絡先 : a\_kitamura07@yahoo.co.jp  
.....